

あゆみ通信

VOL. 157

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

絶対他力の大道 清澤満之師(林曉宇先生訳)

第7章の2

如来は必ず何らかの道を開いて彼らを養って下さるでしょう。もしどうしても生きてゆくことが出来ぬようになったら、それは如来が彼らに死を命じたもうべき時が来たのです。その時は彼らもそれをすなおに受けて死んでゆくべきであります。

ソクラテスが言いました一。

「いつか私がセサリー島に流されていた間、天は人々の温かい慈愛によって私の妻子を養って下さった。いま私が妻子を残して遠い国に旅立ったからとて、どうして天が彼らを養って下さらぬということがありましようか」と。終わり。

(原文「清澤満之全集」・意訳 林曉宇)

引き算の人生

コロナ下で、閉塞感が続く昨今、80歳を越えてくると、何故か自分が生きてきた人生を振り返ることが多くなった。特に、過去を振り返り、「あの時こうしておけば、あーあしてよかった」と考えては、われは振り返り、過去をあれこれ考えることの無意味さを感じられる。

一方、年を重ねるごとに、「あれも出来なくなかった。これも出来なくなかった」と、出来ることがどんどん減っていくことを嘆いている自分もある。

そんな時、宮城顕先生(1931-2008元真宗教学研究所所長、真宗大谷派本福寺前住職)の次の法語を見つけた。

「引き算と言うのは、あと何カ月、あと何日と言う、だんだん手持ちの時間の存在が消えていく。生きると言うことは、一日生きれば一日引き算です。また一日が過ぎてしまったという。そういう引き算の行先は、「こんな私になつてしもうて」という嘆きしか出てこない。それに対して「引き算から足し算の変換」常に「今をもらって生きていく」これが「因縁由」。足し算の人生。その今と言うのは常に「出遇」たおろし一点です。生から死への人生は引き算の人生。逆に死から生へと言う視点に開かれてくる人生と言うのは足し算の人生でしょう」

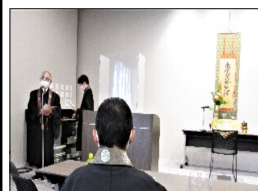
思いを新たに、また、一から出直して、やはり聞法第一を歩もう。(本)

第37回第2組同朋大会 肅々と



去る3月12日(土)午後2時から、コロナウイルス感染拡大により、中止が相次いだ第2組同朋大会が、3年ぶりに御堂会館4階Aホールで、感染対策を徹底した中で開催され、組内より住職、寺族、門徒や推進員38名が参加し、肅々と執行されました。

講師は酒井正夫先生(三重教区道浄寺前住職)で、講題は「願・自身～人生は食、これ道なり～」です。



司会は岸野龍之住職(稱念寺)で、はじめに真宗宗歌、続いて正信偈、草四句

目下同朋奉讃式を皆でお勤めしました。その後、墨林浩組長(光照寺)が開会挨拶で「自粛すれど委縮はせず」の決意で開催したことと、講師の酒井正夫先生から啓発チラシに寄稿していただいたメッセージを読み上げられました。

講義に移り、先生は新型コロナウイルスは「いのちとは何か、いのち



は誰のものか」と言う人生の根本問題を問ひかける大事な機縁である。それは禍ではなく、本願の出来事である。いのちは私の所有物ではない。限りなく響き合う世界である。また、いのちは具体的には「食」の問題である。

今は病気になったり、徘徊したりすると、見捨てられていないか。分断したり、差別して止まないのは、自力の心の虜になっていると。

コロナウイルスに打ち勝つと言う発想ではなく、むしろ共存がどこで成り立つのか学び直さなくてはならない大事な時期を迎えているのではないかなど、力強く話してくださいました。(法話要旨は別項)

閉会の挨拶は、第2組門徒会会長の中嶋ひろみ氏(光照寺門徒)が述べられ、恩徳讃を唱和して閉会となりました。

(レポート：細川克彦《佛足寺門徒》)

第2組聞法会 開始

第2組伝統の聞法会がスタートする。昨年はコロナ感染拡大により、結局2回しか出来ず、参加者も少なかった。

今年は何とか、仏法聴聞の機会を閉ざすことなく開催したいと準備された。

4月聞法会

日時 4月28日(木) 午後2時
会場 宗恩寺(天王寺区四天王寺)
講師 大橋恵真先生

(18組 遠慶寺住職)
参加費 500円
お勤めがあります。



5月聞法会「共に学ぶ正信偈」

日時 5月27日(金) 午後2時
会場 了安寺(天王寺区夕陽丘)
講師 新田修巳先生

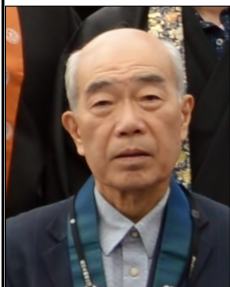


(4組 正業寺住職)
参加費 500円
持参するもの。
念珠、赤本
筆記具等

浄土と言う一味の世界にかえれ

如是我聞

酒井先生の法話聞書き 細川克彦(佛足寺)



わざわい

はじめに。酒井先生が第2組同朋大会の案内チラシに寄稿されたメッセージを紹介します。

このたびの新型コロナウイルスは、たんなる禍ではなくして、そもそもいのちとは何か、いのちは一体、誰のものかという人生の根本問題を、私たち一人ひとりに鋭く突きつけ、投げかけた出来事であると受けとめています。



いのちといひましても、決して抽象的・観念的なことではなくて具体的には食べて生きていることに尽きるのではないかと思います。

現代は味覚、嗅覚、摂食障害等のこともありますけれども、皆さま方とご一緒に本願念仏のみ教を共に仰ぎ、念じながら、食の問題を少しでも明瞭にし、課題にすることができればと願っています。

今日、いのちは私の所有物ではないと言うことを、いろいろの分野の方々が、例えば生命科学の中村桂子氏、また歌の世界では中島みゆきさんとかが発信しています。

いのちは限りなく響き合い、出会いを求め、共存しています。

また「食」を中心に踏まえて、人間の歴史、社会の歴史をとらえ直そうという動きがあると。

いのちそのものは、人間もウイルスも動物も植物も平等である。動物や植物は人間に食べられるために生まれて来たのではない。それは傲慢な考え方である。

また、今は健康だけに価値があるかのように、病気になっ



たり、コロナに感染したりすると、排除したり、拒否したりしている。挙句は自分で自分を傷つけたり、見捨てたりしていないだろうか。それはいのちの事実には背いている。

そんな、自分のことしか考えない、みみっちい、ちっぽけな、弱い存在であることを徹底的に気付かせていただく、そこに人間の尊さがある。

禅の

言葉に

「百華

に香り

あり、

味あり」

と言うのがある。どんな人にも意味があり、尊い存在であると教えられる。そのいのちに目覚めさせてくれるのが「南無阿弥陀仏」のはたらきである。いのちを分断し、選別して、自力の心に振り回されている私たちに、如来は、浄土と言う一味の世界にかえれと呼びかけ、呼び戻し、絶対の信頼をもって待ち続けていて下さると、穏やかに、しかし力強く話してくださいました。終わり。



真宗大谷派 大阪教区第二組
第37回 同朋大会
2022年3月12日(土)午後2時~午後4時
(受付は午後1時30分からです)
講師：酒井正夫 師
三輪教区連中 前任住持
元・龍谷大学 学長
講題：「願・自身
～人生は食、これ道なり～」
会場：難波別院(南御堂) 御堂会館4階Aホール
参加費：1,000円(記念品贈呈)【定員60名】
※マスク着用でご来館下さい。受付で検温を実施します。
参加券
お名前
お住所
お電話番号
お申し込み
お申し込み

紙上法話

大無量寿経の仏道⑧ 延塚知道先生

人に要求しない

僕を育てて

くれた先生も、そうだった。いつでもどこにおっても、人に要求しない。いつでも私は私、あなたはあなたと独立している。そういう人間の関係を結ばれたものは、感動します。僕は松原裕善と言う先生に育てられた。だけど実際は寺川俊昭と言う先生が、手取り足取り育ててくださった。

仏教を勉強するのは、何も教室だけやない。飲み屋さんでもできる。僕は学生の頃から寺川先生によく飲み連れに行ってもろた。もう僕はうれしくてうれしくて、自分一人では頼りないから先生の方へ寄りかかっていく。

でもそうやって寄りかかっていったら、先生はパッと切る。「それはちがいます」と「私は私を生かしている法のはたらきに目覚めて、生きていくものになろうとしている。あなたもそうしてください」とこう言って、仲間を作らない。いつでも、自分は自分で充分なんだと言う形で、人と接している。

僕がそういう感動を受けたのは寺川先生、それから高史明先生も、そうです。いつも私は私ですと、自体満足されている。だから、人に要求したり、人に寄りかかったり絶対しない。いつでも自体満足している。そういう人間の関係を作れると言うのは、素晴らしいですよ。(つづく)



寺川俊昭先生



高史明先生